

# 国際社会学部—中東地域

## 中東を知ることとは世界を理解すること

中東は高校の地理や世界史において西アジアと北アフリカと分類される二つの地域を一般的に指します。国としては、アラブ連盟加盟諸国（アラブ首長国連邦、アルジェリア、イエメン、オマーン、イラク、エジプト、カタール、クウェート、コモロ、サウジアラビア、ジブチ、シリア、スーダン、ソマリア、チュニジア、パレスチナ、バーレーン、モーリタニア、モロッコ、ヨルダン、リビア、レバノン）、イラン、トルコ、アフガニスタン、カフカス諸国（アルメニア、アゼルバイジャン）、イスラエルがあります。本学中東地域では、アラビア語、ペルシア語、トルコ語のうちの一つを専攻言語として選ぶことができます。また、アラビア語は教養外国語として学べるほか、クルド語、ヘブライ語の講義も開設されています。

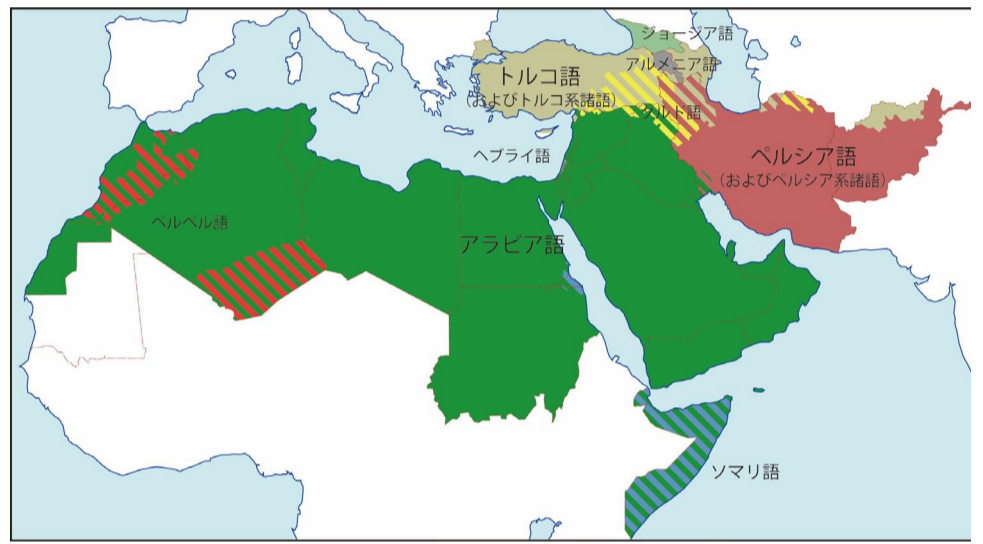
中東というと、文明発祥の地、文明の十字路を思い浮かべることもできますが、砂漠、石油・天然ガス、多様な民族、宗教（イスラーム教）、紛争、過激派、テロ、難民など、必ずしも良いとは言えないイメージもあります。もちろん、こうしたイメージに沿って説明・理解できる出来事が多いのは事実です。しかし、中東がその元凶だと考えるのは、少し安直かもしれません。なぜなら、「中東」(Middle East) は 19 世紀に欧州列強がつけた呼び名だからです。欧州と私たちが暮らす「極東」(Far East) やインドの中間に位置する東方の地域。

クリミア戦争、聖地管理問題、ロシアの南下政策、インド・















中国との通商路確保、そして石油資源——列強は自らの勢力を伸長するためにこの地を争い合いの場とし、上から目線で中東と呼んだのです。中東で紛争やテロが絶えず、混乱が続く、難民問題などが発生するのはそのためです。

本学では、アラビア語、ペルシア語、トルコ語をツールとして駆使することで、中東、とくにアラブ諸国、イラン、トルコ、アフガニスタンに関わる政治、経済、社会、歴史、文化、宗教、言語を学ぶことができます。

世界全体がよい意味でも悪い意味でも引き寄せられる場、それが中東であり、世界を理解するためにも中東を知ることが不可欠です。本学は、この中東で起きていることを直に学びとることができる数少ない場所です。しかし、それは単に「中東オタク」になることではありません。中東という名が示す通り、魅力あふれるこの地域に引き寄せられる世界を学ぶことなのです。



アゼルバイジャン	アフガニスタン	アラブ首長国連邦*	アルジェリア*	アルメニア
イエメン*	イスラエル	イラク*	イラン	オマーン*
エジプト*	カタール*	クウェート*	コモロ*	サウジアラビア*

				
ジブチ*	シリア*	スーダン*	ソマリア*	チュニジア*
				
トルコ	パレスチナ*	バーレーン*	モーリタニア*	モロッコ*
				
ヨルダン*	リビア*	レバノン*		
<p>*アラブ連盟 1945年3月にアラブ諸国の共通の利益を守り、政治、経済、文化といった面で協力関係を強化することを目的に結成された域内協力機構。</p>				

## 自然環境と地形

中東は、降水量が少ない乾燥地域が多く、サハラ砂漠(北アフリカ)、ルバアルハリ砂漠、ネフド砂(いずれもアラビア半島)、カラクーム砂漠(カフカス地域)といった砂漠、ステップを擁しています。また、地中海東岸からカフカス山脈、イラン高原には、温帯気候地域に含まれています。ティグリス川、ユーフラテス川、ナイル川といった世界有数の外来河川が流れ、早くから農業や牧畜が発達し、多くの古代文明が発祥しました。さらに、東西貿易路を結ぶ「文明の十字路」として栄え、ユダヤ教、キリスト教、そしてイスラーム教という一神教が成立しました。

地形は、アラビア半島を乗せたアラビア・プレートが、その北に位置するイラン・プレートに衝突し、衝突帯を形成し、トルコ、カフカス諸国、イラン、アフガニスタンに至る地域に高原、山脈を作り、また地震を多発させています。また、アラビア湾(ペルシア湾)一帯は、生物の遺骸が堆積した地層からなり、世界でも有数の原油・天然ガスの埋蔵量を誇っています。一方、北アフリカはそのほとんどが安定地域に属しています。低地は沿岸部に限られており、そのほとんどは台地、高地、そしてアトラス山脈などからなっています。



(シリア:青山弘之撮影)



(イラン:松永泰行撮影)



(トルコ:川本智史撮影)

## 歴史と文化

中東は、四大文明として数え上げられるエジプト文明とメソポタミア文明、そしてイラン文明の発祥の地として古くから栄えてきました。また東西貿易路を結ぶ「文明の十字路」、一神教興隆の地として多くの国や人々が交流する場として発展を遂げ、さまざまな民族（言語集団）、宗教・宗派がモザイクのように混在し、共生してきました。民族に着目すると、アラビア語、ペルシア語を筆頭とするペルシア系諸語、トルコ語をはじめとするテュルク系諸語、さらにはヘブライ語、クルド系諸語、ベルベル語を話す人が暮らしています。また、宗教は、ユダヤ教、キリスト教、そしてイスラーム教が信仰されており、それぞれの宗教は多くの宗派からなっています。イスラーム教のスニ派とシーア派、キリスト教のギリシャ正教、シリア正教、アルメニア正教、そしてカトリック諸派、プロテスタントなどです。

世界の教科書に登場する地中海文明、キリスト教、そしてローマ帝国は、西洋の歴史や文化の文脈のなかで捉えられがちですが、それを育み、今日に伝えることを可能としたのは、中東という地域の存在でした。ヨーロッパが(西)ローマ帝国の衰退・滅亡に伴い、中世の「暗黒時代」にその身を置くなか、古代文明の叡智を継承したのは、イスラーム教を奉じる国家でした。オリエン特世界屈指の国家であるビザンツ帝国を滅ぼしたオスマン帝国は世界帝国としての名を欲しいままにし、その支配は中央ヨーロッパ、クリミア半島、北アフリカにも及びました。

もちろん、中東は常に繁栄を続けてきたわけではありません。11 世紀から 12 世紀にかけては十字軍、13 世紀にはモンゴルの侵略を受け、衰退を経験しました。ナポレオンのエジプト遠征以降は、西欧列強の干渉が強まり、19 世紀末から 20 世紀初めにかけて、中東のほぼ全域がその支配下に置かれました。

今日の中東諸国の多くは、第 2 次世界大戦と前後して（カフカス諸国はソ連邦の崩壊とともに）独立を果たしました。これらの国のうち、アラビア湾（ペルシャ湾）に面するイランやサウジアラビアといった国々では、1930 年代頃から本格的な石油・天然ガスの採掘が始まり、世界経済の発展を支える一方、石油収入（オイルマネー）を背景に発展を遂げていきました。しかし、世界有数の石油産出地域としての存在は、アメリカをはじめとする西側諸国の干渉を誘発する一因となり、さまざまな紛争や戦争をもたらしています。



(シリア:青山弘之撮影)



(イラン:松永泰行撮影)



(トルコ:川本智史)

## 中東をもっと知りたい人のために

- 青山弘之（編）『「アラブの心臓」に何が起きているのか—現代中東の実像』（岩波書店、2014年）復刻版 ([https://cmeps-j.net/publications/ara\\_shin\\_0](https://cmeps-j.net/publications/ara_shin_0))
- 今井宏平『トルコ現代史—オスマン帝国崩壊からエルドアン時代まで』（中公新書、2017年）
- 今井宏平（編）『クルド問題—非国家主体の可能性と限界』（岩波書店、2022年）
- 岩崎葉子『「個人主義」大国イラン—群れない社会の社会的なひとびと』（平凡社新書、2015年）
- 臼杵陽『世界史の中のパレスチナ問題—中東危機の真相がよくわかる名講義』（講談社現代新書、2013年）
- 小笠原弘幸『オスマン帝国—繁栄と衰亡の600年史』（中央公論新社、2018年）
- 吉川卓郎『ヨルダンの政治・軍事・社会運動』（晃洋書房、2020年）
- 黒田賢治『イランにおける宗教と国家—現代シーア派の実相』（ナカニシヤ出版、2015年）
- 酒井啓子『9.11後の現代史』（講談社現代新書、2018年）
- 酒井啓子（編）『中東政治学』（有斐閣、2012年）
- 鈴木恵美『エジプト革命—軍とムスリム同胞団、そして若者たち』（中公新書、2013年）
- 高岡豊『「テロとの戦い」との闘い—あるいはイスラーム過激派の変貌』（東京外国語大学出版会、2023年）
- 高尾賢一郎『サウジアラビア—「イスラーム世界の盟主」の正体（中公新書）』（中央公論新社、2021年）
- 千葉悠志・安田慎（編）『現代中東における宗教・メディア・ネットワーク』（春風社、2021年）
- 保坂修司『ジハード主義—アルカイダからイスラーム国へ』（現代岩波選書、2017年）
- 松尾博文『「石油」の終わりに—エネルギー大転換』（日本経済新聞出版社、2018年）
- 山岸智子（編）『現代イランの社会と政治—つながる人びとと国家の挑戦』（明石書店、2018年）
- 山口昭彦（編）『クルド人を知るための55章』（明石書店、2019年）
- 吉村慎太郎『イラン現代史—従属と抵抗の100年』（有志舎、2011年）

